

ハンガリー史における「ジェントリ」

——二重王国期社会についての叙述をめぐって——

渡 邊 昭 子

一 はじめに

「ジェントリ gentry, dzsentri」という言葉がハンガリーで広く使われるようになったのは、一八七〇年代後半から八〇年代にかけての二重王国期初頭のことだった。ジェントリはもちろん英語からの借用語である。しかし、この時にはすでに同時代のハンガリー社会についての問題としてしばしば議論されるテーマとなっていた。トリアノン以降は、おもに二重王国期社会についての歴史叙述に登場するようになる。第二次世界大戦後の歴史叙述においても、二重王国期や、場合によっては戦間期の社会について論じられる際にジェントリが現われている。

ジェントリの一般的な理解はおおむね『歴史概念集』

に載っている次のようなものと考えてよいだろう。「一八七〇年代以降、窮乏化し、大部分の領地を失ったが、社会的地位とウール〔紳士〕的生活様式に強く固執する土地所有貴族を指す。後には知的な職業に就かざるをえなくなった小貴族や非貴族出身のホワイトカラー、知識人、土地所有者にも使われた⁽¹⁾」。しかし、歴史叙述をさらに詳しく見れば、ジェントリの内容やその位置付けについて叙述ごとに異なる場合や、さらには矛盾する場合も見られる。これを端的に示してくれる例として、ハンガリーの「ブルジョア化」に関する近年の歴史叙述の構成をタイプ分けしたハルモシュ・カロイの研究をあげることができる⁽²⁾。一九八八―九二年の五年間に発表された文献を整理し分析したなかで、ハルモシュは、

長期的なハンガリー社会の変化を扱った叙述を大きく二つに分けている。一つは主流を占める「自己確信的叙述」(「自分自身の前提には取り組まない」という理由から名付けられた)と、もう一つはこれに対して「懐疑的な立場」をとる叙述構成である。この二つはさらに数種類に分類される。現在の歴史叙述のジェントリに関する問題点を明らかにするため、まず、このハルモシユの分類に沿ってそれぞれのジェントリ像を比べてみよう。

「自己確信的叙述」は「主役」の数により「二極化的叙述」、「一極化的叙述」、「ラバ(驃馬)的構成」の三種に分けられる。三種類の叙述にあつてはいずれもジェントリが二重王国期に「主役(の一つ)」として登場する。それぞれの違いはもう一つの主役であるブルジョアジーとの関係にあり、協力や同化の場合は「一極化的叙述」、対立の場合は「二極化的叙述」となる。ハルモシユが「一極化」の例にあげている文章でのジェントリは近代化の中で生まれたテクノクラートで、ブルジョアジーや下層の者たちに対して開かれている。一方、「二極化的叙述」の場合、改革期の進歩的中貴族が四八年革命の挫折を経て反動貴族層となったものがジェントリであ

り、ブルジョアジーに対し敵対的、閉鎖的なまま、戦間期にいたるまである程度の地位を保ち続けていた。以上の二種類の叙述の折衷品が「ラバ的構成」で、ハルモシユがとりあげた文章では、改革期は「二極化」の、二重王国期には「一極化」の叙述に近く、さらに十九世紀末から新たな第二極として社会主義勢力が現われるという叙述である。ただし、二重王国期の時代のジェントリの性格については「二極化的叙述」に近いので、時代ごとの接ぎ合わせという意味だけでなく、内容そのものが「驃馬的」である。ハルモシユは以上の三種類の構成を並べただけだが、実際には、個々の材料を組み合わせた様々な歴史が描かれている。このように、一般的な歴史叙述のなかでジェントリは重要な役割を与えられているにもかかわらず、その示す範囲、性格付け、そして評価は多様である。

「自己確信的叙述」に対して「懐疑的な立場」には、それぞれ「理念型的アプローチ」「思想史的再構成」「脱構築」と名付けられた三種類の叙述のタイプがあげられているが、いずれもジェントリを「主役」に据えたものではない。唯一、「思想史的再構成」にあげられ

たベンダ論文のなかで、ステレオタイプとしてのジェントリの存在が言及されるだけである。⁽³⁾しかし、既存の歴史叙述に「懐疑的」な叙述は方法論においても新たな視角を呈示していて、示唆に富むものが多い。ジェントリに限ってみれば、とくに、「思想的再構成」であげられた前掲のベンダ論文およびハルモッシュ論⁽⁴⁾のアプローチが有用だろう。いずれも「ブルジョア」や「ブルジョア化」という概念自体を歴史的産物として、しかも実態ではなくプログラムや規範として研究の対象と考える試みである。⁽⁵⁾

以上を整理すれば、ジェントリに関する歴史叙述の問題点として次の三点をあげることができるだろう。第一に誰を指すのかという内容の混乱である。この問題を左右している第二の問題として考えられるのが、それぞれの著者の問題関心から生じる二重王国期社会のとらえ方の違いである。例えば、ハルモッシュの引用では、「一極化的叙述」はヨーロッパ諸国と類似の発展がハンガリー社会にも見られたことを主張するのに対し、「二極化的叙述」はハンガリー社会の特殊性を主眼に置く。⁽⁶⁾このように、ジェントリの内容は二重王国期社会への評価と関

わりが深いので、各著者の問題関心も視野に入れて検討する必要があるだろう。さらに、第三点として、ジェントリを扱う方法の問題があげられる。これまでジェントリは実態として扱われてきた。⁽⁷⁾しかし、ジェントリの内容自体が著者の問題関心に左右されてきたとすれば、実態として取り扱う以前の問題として、もしくは実態とは別の問題として、概念の整理が必要だろう。以上の三つの問題は、歴史叙述のなかだけでなく、二重王国期に書かれたものに関してもあてはまる。というのも、歴史叙述に引用されてきたこれらの文章自体が、たがいに対立、矛盾する社会評論的な諸々の主張や議論だったからである。

本稿の目的は、以上の点を念頭におきながら、ジェントリの意味内容について整理、検討することである。前半では歴史叙述のなかでのジェントリについて、後半では二重王国期における叙述のなかでのジェントリについて検討し、最後に歴史叙述においてどのようにジェントリを扱うことができるのか考えてみたい。この作業を通して、社会集団を示す概念を歴史叙述で使う際の問題を浮き彫りにできるのではないかと考えている。

二 歴史叙述のなかのジェントリ

1 戦間期の歴史叙述

後々の歴史叙述にまで影響を与えるようなジェントリ像を登場させた著作として、セクフュー・ジュラの『三世代』⁽⁸⁾を欠かすことはできないだろう。一九二〇年に出版されその後も版を重ねたこの本は、戦間期、多大な影響力を保ち続け、「この時代の基本書」と呼べるほどの存在だった⁽⁹⁾。

『三世代』のなかでのジェントリは中貴族に近い意味で使われているが、中貴族よりも狭い。セクフューによればジェントリの名が現われた頃にその中心をなしていたのは「今だ領地を維持している少数の中貴族の家系」であり、『ウールの』職業に就いている都市在住の親類達⁽¹⁰⁾がそれを補充していた。すでにここでまったく異なる二種類の職業の人々が含まれているのだが、セクフューが考えるところ、彼らは「ジェントリの階級意識」のもとに「非貴族の知識人だけでなく平貴族の広い層をも排除し」て排他性の殻に閉じ籠ってしまっただった。

セクフューから見たジェントリについての問題は、ジ

ェントリがこのように閉じ籠ってしまったために、「堅固で一体の中間階級が成長することがなかった」ことだった。というのも、セクフューは、より以前の時代の中貴族が「全民族社会の支柱」、「民族を指導する使命」という役割を果たしてきたととらえ、二重王国期にもそうであることを期待していたからである。その使命を果たすものとしてセクフューが理想とするのは名前の借用元のイギリスのジェントリであり、それは「商工業や学問や軍事面で秀でた貴族でない者たちをも自身に含み込む、旧来の中貴族よりも幅広い階級」を意味していた⁽¹¹⁾。

さらにセクフューの問題関心を遡れば、敗戦、二重王国の消滅とトリアノン条約による領土の三分の一への縮小、短期間のうちに起きた二つの革命とその崩壊など、総称して「瓦解」と呼ばれた一連の変動と混乱へと行き着くだろう。『三世代』が書き始められたのはこの直後の一九一九年の秋だった。当初の題である「我々の民族的荒廃、歴史的研究」からも、近代史の叙述を通して「瓦解」の原因とその責任者を突き止めようとしていることがうかがえる。そしてセクフューの考える「瓦解」の社会的な原因は、急激な経済発展のなかで増大する中

間階級が「有機的な労働」を行なえなかつたことであり、その責任は、その中心となるべき使命を果たさなかつたジェントリにあるのだった。

以上のように『三世代』ではジェントリの排他性が強調されているわけだが、ジェントリが排除しようとした人々のジェントリへの関係をセクフューはどのように見ているのだろうか。セクフューによれば非貴族のブルジョアジーの多くを占めていたのはユダヤ人であり、「ユダヤ人は……ジェントリと闘おうなどという試みはせず、省庁と県の見せかけだけの華やかさを……彼らに残し、自らは、法律家、医者、商工業に従事する知識人というよりよい収入を約束する道へと進ん」だ⁽¹³⁾という。また、ジェントリより広い範囲を含むと考えられる平貴族については、二重王国期に土地を失って官職に流入し、「民族的幻想」に彩られた「荒んだ」生活を送り、上昇してくる都市民や農民の子どもこの生活を模倣するようになった⁽¹³⁾という。セクフューはこれらの人々とジェントリの関係について曖昧なままにしているが、以上の叙述は、「協力」「模倣」「同化」という意味合いにも考えられよう。

セクフューは一九三四年、『三世代』に「トリアノン以降」の章を加えて『三世代とそれに続くもの』を著し、同じ時期に大冊の『ハンガリー史』⁽¹⁴⁾の近現代の部分執筆しているが、これらの著作におけるジェントリはその排他性よりもむしろ他の層との融合の部分に強調が置かれるようになっていいる。『ハンガリー史』では、ジェントリが意識上は排他的であるとしながらも、「八〇年代にジェントリと名付けられた中貴族は、以前のサンダル貴族(極小貴族)や地方の手工業の親方をしている貴族などにより自身を補充し」、「後に二十世紀にはブルジョア出身者をも受け入れ、実際のところ、かなり多くのユダヤ人との結婚の結果、他の血との混合も進んだ」と記されている⁽¹⁵⁾。

ジェントリ像の変化の背景にはセクフュー自身の思想の変化を読み取ることができるだろう。二〇年代、セクフューが期待していたような「民族的指導層」となるべき中間階級は現われず、三〇年代には急進右翼とファシズム諸政党が勢力を伸ばし始める。このようななかで、第一次世界大戦後のハンガリー社会が歩んだ方向に対してもセクフューは批判的に見るようになった。「トリア

ノン以降」の章で描かれる戦間期社会は、非貴族が数の上で圧倒的に貴族よりも多く加わりながらも、「権威」の原則により支配される「ネオバロック」社会である。⁽¹⁸⁾この場合、ジェントリは戦間期社会の形成に影響を与えたものとして、「瓦解」の前後での連続性に重点が置かれて語られる。その結果、二重王国期のジェントリは、排他性から一転してその範囲の広さが強調されたのだ⁽¹⁷⁾。

以上のように、セクフューの著作のいくつかに現われるジェントリ像だけを抜き出して見ても、けっして統一のとれたものではない。ジェントリの内容の変化とともに、二重王国期社会のとらえかたも、『三代』の叙述の「多極化」もしくは「無極化」から、『ハンガリー史』の「一極化」という図式へと変わってゆく。そしてこの違いは、それぞれの執筆時にセクフューが感じていた社会的な問題と結び付いていたのだった。

2 第二次世界大戦後の歴史叙述

戦後しばらく取り上げられることのなかった「中間諸層」の役割の重要性を最初に指摘したのはバラージュ・

ペーラだった。バラージュは、ハンガリーがファシズムへと至る原因として、十九世紀後半から保守反動化してゆく中間層の役割に焦点を当てた。ただし、彼は中間層を小市民層と同一視し、ジェントリつまり「新」絶対主義の下で大部分が負債を抱えた中地主」を支配層に含めていた。⁽¹⁸⁾

バラージュの議論に対し、「ハンガリーの『中間階級』問題の主役はジェントリ、もしくはジェントリ的性格の『ウールの』、または『歴史的』『中間階級』であった」と主張して、中間層問題に再びジェントリを持ち込んだのはハナーク・ペーテルだった。⁽¹⁹⁾

ハナークによるジェントリ論はおおむね次のように要約できるだろう。ブルジョアジーが少数で力を持たなかったハンガリーでは、自由主義中貴族が改革期から四八年革命に至るまでブルジョアジーの役割を果たしたが、その後のハプスブルクによる圧迫と資本主義経済の発展に適応できず、「反動化した階級が、……『中貴族』の代わりに『ジェントリ』を使った」。当初、七〇年代から八〇年代には、「ジェントリを特徴付ける核をなしていたのは権威ある中地主と比較的小さめの大地主の家系

だった」という。世紀転換期になると「負債を抱えて土地や信用を失った土地所有者にこの名が適用され、荒廃と価値下落を連想させるニュアンスを得」る。この頃には「ジェントリのより多くの集団を支えていたのは官職」だった。官職に流入した彼らは「当時、独自の社会的集団として結晶化しつつあった官僚―将校層の性格を決定」する。世紀転換期を過ぎると「ジェントリの沈下の過程が始まった」。「ハンガリー化したドイツ人やスラヴ人のブルジョアや知識人、非貴族の官僚、新地主たちが『ウール』的な世界に流入し、受容されなかった広い層も、ジェントリ的精神をもつ村や町の『インテリ』たちを基準と見なし、模倣した」。このようにして、世紀転換期にはジェントリおよびジェントリを模倣する小ブルジョアジーによる「ジェントロイド社会」が成立する。この多様な層を結び付けていたものとしてハナークがあるのは「意識と生活様式の共通性」であり、具体的にはショーヴィニズム、反ユダヤ主義、反民主主義、反社会主義などの「政治的反動」と、カードゲーム、負債、決闘などの「精神的荒廃」である。⁽²⁰⁾

このようにハナークは三〇年代のセクフェーに共通する「融合」の視点からジェントリ論を進めた。両者の違いはむしろ問題のたて方そして問題関心のあり方に現われている。ハナークによれば、マルクス主義歴史学の初期の研究では「支配階級と被抑圧階級の間にある多様な諸層に関心があまり向けられなかったのは理解できる」ことだが、研究が進むうちに、「中間諸層の詳細な分析とその歴史的役割の実際的な調査なしには……ハンガリーのナシヨナリズムの独特な形態やブルジョア急進主義、世紀転換期の文学の傾向、ファシズムの社会的基盤などの重要な歴史的問題を十分に細かく深く把握することはできない」ことが明らかになったという。⁽²¹⁾ このように戦後の歴史叙述は、階級史観をもとにおきながら、ファシズムや反ユダヤ主義、また戦前までのハンガリー中心主義的なナシヨナリズムなどに関心を傾けてきた。これらが戦後のジェントリ像の形成に役割を果たしていることは、ハナークの叙述だけでなく、各テーマごとの著作からも見て取れる。ファシズムについて見れば、その基盤となったのはジェントリに影響を受けた「ジェントロイド」層とされる。⁽²²⁾ ジェントリは一八八〇年代前半に盛り

上がった反ユダヤ主義の一翼を担ったのであり、これは(23)ホロコーストへと至る戦間期の反ユダヤ主義の第一波と見なすことができる。(24)また、ハンガリーのナシヨナリズムを諸民族の抑圧と結び付いた偏狭なものにしたのは、資本主義発展により経済的に没落し思想的にも反動化したジェントリだった。(25)

以上のように問題関心ごとにジェントリに新たな横顔が加わった。ハナークの叙述は新旧の歴史叙述の内容と課題を総合しようと試みるものだったと言えるだろう。しかし、ハナークのジェントリ像は実証に重きを置いたものでなく、内容をあまりにも拡大しすぎたために、「ジェントリの意識」以外にジェントリを定義できないという袋小路に入り込んでしまったのではないだろうか。以上、セクフェーとハナークのジェントリ像を中心に、それぞれの著作が執筆当時の問題関心を過去に投影する形で二重王国期のジェントリを描いてきたことを見てきた。それでは、これらの「歴史」を経る以前、ジェントリが同時代的に語られていたときにはどのような関心の下に、どのような意味を持たされていたのだろうか。以上の検討で現われてきたジェントリ像と照らし合わせな

がら、さらに整理を進めてみよう。

三 同時代の議論に見るジェントリ

1 諸々のジェントリ論

後の歴史家たちがジェントリ論を展開する際に傍証として引用している諸々の文章はどのような内容のものだったのだろうか。ジェントリをめぐる論争は少なくとも一八八〇年代と一九一〇年の二度、活字の上で行なわれ、前者にはさらに二つの論争をあげることができる。一つは統計学者で与党自由党の議員でもあったラーング・ラヨシュの書いた「社会的負債」をめぐる同じく自由党議員のソング・パールとの議論で、八〇年頃のものである。もう一つは与党自由党のイデオログであったベクシチ・グスターヴの『我々の社会と民族的使命』(八四年)に対して、法律家であり作家でもあったマルギタイ・デジェーが『ジェントリは生き残る!』(八五年)という題で反論したものだ。そしてその四半世紀後、法学者コンチャ・ジェーゼーの雑誌論文「ジェントリ」(29)に対して、文学史家バイザ・ヨージェフがやはり「ジェントリ」(30)という題で反論している。いずれの論争でも、

先にあげた著者が現状への批評や分析を行なった上で将来あるべきジェントリ像を呈示し、それを自称ジェントリが批判するかたちになっている。以下、それぞれの文章の要旨を概観しながら、どのような視点からどのようなジェントリ像が考えられていたのか探ってみよう。

八〇年代の議論では、ラーングとベクシチのジェントリ論がほに近い立場にある。彼らによれば、当時ジェントリのある部分で自由主義からの乖離、つまり彼らの見る「保守化」が起きていた。これは農業保護主義と反ユダヤ主義の拡大を指していたのだが、その主導者らは、ジェントリつまり中地主貴族が経済的に困窮し、一部は土地を手放して知的職業に就かざるをえなくなった問題の原因を政府の自由主義政策に見ていた。しかし、このような自分たちだけの利益を守ろうとする動きこそラーングやベクシチにとって問題だった。なぜなら、過去においてそうだったように現在も将来もジェントリがハンガリー社会の中心に居続けるためには、自由主義を堅持し、イギリスのジェントリのようにブルジョアやより下層から上昇してくる者たちも受け入れて自身を強化していくことこそ必要だと彼らは考えたからである。これ

と同様の主張は、同じく与党自由党議員だったベルゼヴィツィ・アルベルトの「ジェントリについて」(八四年)⁽³¹⁾にも見られる。しかも、ベルゼヴィツィの場合、自身が十三世紀にまで遡ることができる古い平貴族の家柄の出身であり、文中でジェントリの理念を「我々のものとする」と主張することからも、このようなジェントリを自身に重ねて考えていたと言えるだろう。⁽³²⁾

二重王国期末期に書かれたコンチャの「ジェントリ」においてもイギリスのジェントリが理想であり、ハンガリーのジェントリがブルジョアジーも含み込むより広い階層となるべきことを主張している。しかし、農業主義や反ユダヤ主義についてはジェントリの組織化の萌芽として一定の評価を与え、また、中地主の安定と育成のための法整備を国に求めるなど、先の議論に比べれば、自由主義の色彩が薄れ、より「保守的」になっている。

ラーングの議論を批判したソクタグは、十七世紀にまで遡ることができる名門貴族出身であり、四八年革命に至るまで自由主義的反政府派の指導者の一人として活躍した経歴を持ち、八〇年前後には下院副議長も務めている。とはいえ、ラーングの主張に対しては農奴解放の負

担や高税による中地主貴族の経済的窮状を訴えるのみであり、ジェントリの衰退を諦観しているようである。

ベクシチのジェントリ論に異を唱えたマルギタイの主張は、オーストリアからの完全独立の要求と反ユダヤ主義という反与党的な立場から書かれている。マルギタイによればオーストリアとの「妥協」を初めとする政府の政策の失敗が民族の指導者であるジェントリの困窮をもたらしたのであり、ベクシチの融合論は、それに気づいたジェントリが本来の野党性を取り戻す前に、政府側にあるユダヤ人をジェントリにとって代えようという政府の企みなのだった。自身が土地所有貴族であるマルギタイのジェントリは、その中心に昔ながらの中地主貴族を置きながらも、大貴族、ブルジョアジー、民衆のいづれにも結び付く。ジェントリから完全に排除されるのは、宗教と人種の違いにより同化しえないユダヤ人であった。⁽³⁴⁾ コンチャの融合論への反論として記されたバイザのジェントリ論は、排他性を強調するものだった。バイザによれば「ジェントリの世界観のおもな構成物は、政治的には保守主義、経済生活では農業主義、社会生活では騎士性と排他性である」⁽³⁵⁾。彼の主張するジェントリには裕

福な一部の中地主貴族と、土地を失っても彼らと起源と伝統により結び付いている官僚だけしか含まれなかった。しかし、民族や国家における彼らの指導的な役割も強調していることは、他の層とまったく関係を持たないわけではなかったことも示している。

以上のようなジェントリ論からも明らか通り、中地主貴族以外の誰をジェントリに含め、それがどのような特徴をもつかは著者によって異なっていた。それぞれがそれぞれの立場から発言するのみで、もともと噛み合わない議論だったのである。少なくとも八〇年代の自由主義者たちとコンチャとはイギリスを見本としたジェントリ理念があったが、それへの反論は三者三様だった。政治的立場もまちまちである。唯一矛盾しそうにないのは、偉大な過去を持つ中地主貴族の少なくとも一部が、経済的な苦境のなかで土地を手放して官職に就いたという「事実」のようだが、これすらもそれぞれの議論の一端として挿入されている可能性は排除できないだろう。⁽³⁶⁾

2 反ユダヤ主義および農業主義との関係

次に、ラーニング、ベクシチ、ベルゼヴィツイがジェン

トリ論で批判している反ユダヤ主義と農業主義から見て、ジェントリはどのような関係にあったのか検討してみよう。

政治的な反ユダヤ主義は、七〇年代後半から八〇年代にかけて広まった。当初は自由党の議員で土地所有貴族でもあったイシュトーツィ・ジェーゼー⁽³⁷⁾が時折議会で反ユダヤ的な発言を行なう程度だったが、八二年のティサエスラール事件(ティサエスラール村で少女が死体で見られ、偽証によりユダヤ教徒に儀式殺人の疑いがかけられた事件)の波に乗って、翌年に「全国反セム党」が作られ、さらに翌年の選挙では十七人の議員が当選した。しかしこの動きは長く続かず、八七年にこの政党は解散してしまふ。党の綱領には土地所有者の保護も掲げられているが、綱領にある十二点すべてを見れば多方面にわたるユダヤ人の活動の規制を訴えているのであり、ジェントリという言葉が登場していないだけでなく、土地所有者の保護ばかりを主張しているわけでもない⁽³⁸⁾。

さらに、全国反セム党指導者の一人でやはり貴族であるシモニ・イヴァーソンの著作『民族的悲喜劇』(八〇年)を見ると、マルギタイのようにジェントリが強調される

ことすらなかった。「我々がどんなにジェントリに親近感を抱いていても、彼らが豊かな銀行家や豊かな大貴族よりもどんなに愛国心があるか認めざるをえなくても……政治的な一体の精神を……彼らはもはや有していない」のであり、そのことは「国内問題の解決のためと言われながら共通関税圏をもたらした政党合同(それまでオーストリアからの完全独立を唱えていたティサ・カールマーン率いる中道左派党が与党デアーク党と七五年に合同したこと)や、今だジェントリが優勢な自治体の多数がマメルーク(自由党追従者たちの蔑称)の議席を増やすのを手伝ったことが証明している」と、むしろ反セム党の敵対者、自由党の追従者としてジェントリを見ていた⁽³⁹⁾。

確かに、自由党政府が当初から反ユダヤ主義に反対する発言を行なっていて、ティサエスラール事件の後に各地に飛び火した反ユダヤ暴動や八四年選挙での反セム党の活動に対して鎮圧や妨害などの措置を取っていたことからすれば、ジェントリは反ユダヤ主義の反対者だったことになるだろう。それどころか、先にあげた自由党議員ベクシチの議論はユダヤ人もジェントリに融合するべ

きことをはっきりと主張していたのだった。

以上のように、ジェントリに含まれるだろう人々が反ユダヤ主義の動きに関わっていたことは否定できないが、彼らがジェントリを自称として強調していたのか、また彼らがこの運動の支持基盤をジェントリに求めて活動していたのかは疑わしい。さらに、ジェントリの名の下に彼らの動きに反対する者たちすらもいたことから、ジェントリと反ユダヤ主義との関係を断定することには慎重になるべきだと言えるだろう。

ジェントリの特徴で反ユダヤ主義とならん言及される農業主義運動についても同様のことが見てとれる。当時の農業主義者の代表的著作としてあげられるアンドラーシ・ゲーザやセーチェニ・イムレの著作を見ても、土地所有者の保護の必要性は書いてあるが、ジェントリを連呼しているわけでもなければ、とりたてて中地主の保護のみを主張することもない。⁴⁰これを、ベルゼヴィツィは「すべてにおいて土地所有者、とくに小さめの土地所有者の利益に好ましいような経済政策」——これがジェントリの救済者たちが掲げる大まかなプログラムである」とジェントリに引き付けて書いている。⁴¹しかし彼自

らもこれに対抗して、ジェントリを中心とした自由主義に基づく中間層の融合という別のプログラムを掲げている。このように、農業主義について見ても、ジェントリとの直接的、排他的な関係について断定するのは困難である。

以上、ジェントリとその特徴とされた反ユダヤ主義や農業保護主義運動との関連について検討してきたわけだが、結局のところ、これらの運動ともジェントリが排他的な関係を結んではいなかったと考えていいだろう。

3 新たな視点に向けての試論

それでは、ジェントリはどのようにとらえ直すことができるだろうか。以下、国民統合および貴族の意味付けという点から考えてみよう。

同時代のジェントリ論を見てみよう。ベクシチは国内のスラヴ人をハンガリー化するため、強力な中間階級によって民族の一体性を作り出すことを目的としてジェントリ論を書いている。そしてベクシチに反対するマルギタイも、オーストリアからの完全独立を担う者として、ハンガリー民族の中心をなしてきた中地主貴族の周囲に

「愛国的な」中間階級を見いだしたのだった。両者のナシヨナリズムの示す政治的方向は異なるが、中間階級ならびに民族の統合への要求は共通していた。

この意味での両者の違いは、誰が、そしてどこまでがその統合に加わることができるのかという枠組みの違いだった。一八四八年以前、貴族身分は「一体」とされ、基本的には彼らのみが国政に参加する権利を持っていた。

この意味では貴族身分だけが「国民」だった。しかし、四八年に貴族の特権は廃止される。下院の選挙権は、一代限りで旧来の有権者に与えられた他は、財産、もしくは一定の職業に就くことによって手に入れることができるようになった。⁴²⁾ 言語的に見れば六八年の「民族法」によりハンガリー語が公用語と定められ、ハンガリー語使用者のみが完全な政治的権利を持つことになった。宗教的にはユダヤ教徒がもっとも周縁的な地位にあったが、彼らが個人としてキリスト教徒と同等の政治的市民的権利を得るのは六七年であり、宗派として他のキリスト教の公認諸宗派との平等が定められるのは九五年だった。ジェントリ論が闘わされていた時期は、ユダヤ教徒の位置付けをめぐって議論がなされていた時期でもあった。

経済力を持ちハンガリー語を話すユダヤ教徒まで「国民」に含むかどうか、ベクシチとマルギタイの分かれ目だったと考えることもできるだろう。

政治的に見ても、ジェントリの言葉が聞かれるようになった時期は、自由党の安定した長期政権下で様々な対立が表面化し始める時期でもあった。議会のなかでは七五年の政党合同により自由党が安定多数を獲得したとはいえ、完全独立を主張する野党との「国制」をめぐる対立はつねに主要な争点だった。これ以外にも、前述の農業主義運動は、明確な政治的潮流にまでなるのは九〇年代からといえ、すでに政府にとっての不安材料となっていた。また、反ユダヤ主義政党自体はそれほど強力にもならず短命に終わったのだが、諸教会間および国家と教会との関係を自由主義的な方向で整備しようとする政府に対してとくにカトリック保守派の反対は大きく、九五年に一連の法律が制定されるまでいくども議論が繰り返されてきた。この議論の焦点の一つは前述のユダヤ教会の位置付けをめぐるものだった。このような対立を越えた統合を進めようとして自由党の論者たちが持ち出したのがジェントリだった。しかし一方で、それに対抗しよ

うとする者たちも別のジェントリ論を主張する場合もあったのである。

このように、統合のあり方は論者により多様だった。

しかし、その中心には必ず中貴族が据えられていた。この背景として、すべての論者に共通し、後の歴史叙述にも受け継がれている中貴族の歴史的な役割についてのイメージをあげることができるだろう。つまり、つねにハプスブルク家寄りだった大貴族に対して、中貴族は県の中枢部にあつてハンガリー国家と民族を維持してきた。

そして改革期から四八年革命にかけての時期に自由主義的改革をリードし、自ら特権を捨ててハンガリーの近代化への道を拓いた。このような中貴族のイメージが二重王国期にはまだ現実に繋がるかたちで生きていたからこそジェントリ論がこれほど活発になったのではないだろうか。過去の役割に重なるかたちで現在の中貴族の役割に期待する声、もしくは中貴族の役割を主張する声がジェントリ論となったのである。こう考えてみると、貴族の持つイメージとそれが近代において果たした役割についても、「反動的」「後進的」という見方はひとまずおいて検討してみる必要性が浮び上がってくるのではないだ

ろうか。⁽⁴⁴⁾

四 おわりに

以上のとおり、歴史叙述のなかにおけるジェントリは、その時代に限定されたそれぞれの著者の問題関心が実証に先立って導き出した像である面が強かった。それゆえに書き手ごとのジェントリ像の差異は大きく、相反する内容ともなった。さらに、もとをたどれば、ジェントリという言葉が使われた当初からその内容は多様で、やはり著者それぞれの問題関心によって語られていた。しかも当時はあるべき社会像への議論のなかでジェントリが扱われていたのであり、実態分析よりも個々の著者の主張に力点が置かれていた。しかし、同時代の評論にしても、歴史叙述にしても、著者の論理を離れて他の叙述へと受けとられてゆくことになる。だがその一方で、これらが後の時代の叙述を大きく規定していることも見過ごしてはならないだろう。

このように、ジェントリは現われた時点から実像というより思考上の構成物であり、矛盾する内容を含み込んでいたという視点に立てば、それを実態研究のための概

念として用いることには慎重にならざるをえないだろう。⁽⁴⁵⁾もし実証に基づく分析を行なうなら、より広い範囲でのベネデクのような作業が進められねばならない。中小貴族や上級下級の官吏、将校、商工業者、知識人などジェントリに関わるすべての人々に及ぶ詳細な実態分析を行なうには現地での組織的な調査が必要だろう。一方で、ジェントリ概念の整理にしても、より広い範囲でのより詳細な検討が必要である。本稿では社会評論的な文章にかぎってとりあげたが、ジェントリはミクスアート・カールマンをはじめとする作家たちにより、文学作品のなかでも描かれてきた。これらにおけるジェントリ像を確かめた上で、その歴史叙述との関わりについてまで考察の範囲が広められねばならないだろう。

(1) Általános történelmi fogalomgyűjtemény, szerk.: Markó László, Bp., 1992., 68. 「ウォールグ」は紳士、主人等と訳せるが、さらに、「ハンガリー語辞典の表現を借りるなら」「搾取階級に属する人」や「搾取階級の倫理に適する男性」等々意味してゐる。

(2) Halmos Károly, Magyarországi polgárosodás, Tallózás az 1988-1992 közötti történelmi irodalomban.

AETAS, 1994/3, 95-154. 本稿では polgárosodás を「ブルジョア化」と直訳したが、もっとも広義には、ハルモシュが表題について本文中で書き直している表現「十八世紀から二十世紀まで広がる社会的変化をどう名付けることができるのか……」が適当だろう。ただし、一般には、言葉そのものが表わすとおり、ブルジョア polgar の登場、拡大と関連づけて考えられてきた。もちろん、都市民、資本家、市民等、ブルジョア自体の意味が多様であるが、後にあげる論文でベンダが指摘する「ブルジョア神話」つまり「近代文明を創出する、ダイナミックで魅力的なブルジョア、彼らは過去を、身分制社会を破壊し完全に新しいメンタリティーと社会を形成する」という「神話」は歴史叙述のなかで生き続けてきた (Benda Gyula, A polgár és a polgárosodás a történelmi irodalomban, *Rendszég és polgárosodás*, Bp., 1991., 5-11., 7.)。このような叙述のなかで、ジェントリはブルジョアによってとって変わられるべきハンガリーの過去の遺物としてしばしば登場してきた。つまり、ジェントリの見直しは、以下に紹介するブルジョアの見直しと対になっていると同時に、「ハンガリー史のとなえ直しにも直接に関わって」と考えられる。

(3) Benda, 8.

(4) Halmos Károly, Polgár-polgárosodás-civilizáció-kultúra. A társadalomtörténet alapvető kategóriáiról a XIX-XX. századi lexikon- és szótárirodalom tükrében, *Századok*, 1991./2-3., 131-166.

(5) この他、「理念的なアプローチ」と題されたケサエール論文は、市場経済ならびに民主主義という視点からハンガリー史をとらえ直し、経済と政治と社会とが必ずしも軌を一にした発展を行なわなかったことを指摘し (Kövér György, *Piacgazdaság-polgárosodás-demokrácia. A mai magyar átalakulás történelmi perspektívából, Magyar Tudomány*, 1991/1, 30-46.) 「ソヴェット化」の概念の解体にまで達した」という意味で『脱構築』と名付けられてゐるトート論文は、身分制社会からの連続性により近代の社会を分析してゐる (Tóth Zoltán, *A rendi norma és a "keresztyén polgárosodás". Társadalomtörténeti esszé, Századvég*, 1991/2-3, 75-130.)。ふたつ「四四」確信的叙述」の前提にある議論に疑問を呈示してゐる点では、ジェントリの再検討に道をひらくものと評してゐるべきである。

(6) Halmos, *Magyarországi polgárosodás*, 107-8.

(7) 近年の実証的な研究でジェントリに関係するものでは、ネネテク・カーゲルのものがあげられる (Benedek Gábor, *Miniszteriumi tisztviselő a dualizmus idején, ELTE Bölcsészdoktori disszertáció*, 1988.)。ネネテクは「二重王国期の上級官僚の個々の出自や経歴を検討した結果、同時期の官僚たちの多くは一八六〇年代かそれ以前、もしくは親の代からの官僚であり、新貴族らもむしろ自分や子供の昇進の手段として貴族化した」という結論を導いている。ネネデクの研究は、ジェントリに含められるだろう者たち

の実態に迫ることにより一般的なジェントリ解釈に修正を促すものである。

(8) Szekfű Gyula, *Három nemzedék*, 1920, Bp., *Három nemzedék és ami utána következtek*, 1934, Bp., rep.: 1989, Bp.

(9) Gunszt Péter, *A magyar történelmi társadalom története*, Debrecen, 1995, 176.

(10) Szekfű, rep., 317-8.

(11) Szekfű, rep., 317-9.

(12) Szekfű, rep., 333.

(13) Szekfű, rep., 311-3.

(14) Hóman Bálint - Szekfű Gyula, *Magyar történelmi I-VII.*, Bp., [1929-34].

(15) Hóman Bálint - Szekfű Gyula, *Magyar történelmi V.*, Bp., 1943, 519.

(16) Szekfű, rep., 402-15.

(17) 歴史叙述だけでなく、このころから広まる社会誌叙述にも共通した描かれ方が見られる。例えば、四三年に書かれたヘルデイ・フェレンツの「ハンガリー社会」はセクンダー以上に「融合」と「協力」に重点を置く。すなわち「二重王国期の前半、「旧来の貴族身分はウールル中間階級 (ジェントリ) として社会のより下の部分を無条件に指導下に置き、新興ブルジョア階級は「ハンガリー貴族の役割を敬意をもって見ていた」のであり、後者が社会の中で独自の勢力となる九〇年代以降には、農民や労働者に対抗す

- る形で両者の「新たな妥協」が結ばれた (Erdei Ferenc, *A magyar társadalom, Magyar Élet*, 1943, 12-36. *A magyar társadalomról*, 1980, Bp., 347-72, 354-7.)⁹⁰ ちょうど戦間期にはこの二者の間になされた深い亀裂が生じながら、旧来の特権層が政治的な主導権を握り続けた (Erdei, 365-7.)⁹¹
- (81) Balázs Béla, *A középrétegek szerepe társadalmunk fejlődésében*, Bp., 1958, 55用部分1918.
- (92) Hanák Péter, *A magyar "középosztály" fejlődésének problémáijához, Valóság*, 1962/3, 23-39.
- (93) Hanák Péter, *Vázlatok a századelő magyar társadalomról, Történelmi Szemle*, 1962, 219-223. ハートマンは「中間階級」の語を用いたのを書いているのだが、その前の「支配階級」の語こそ土地持たのシホントリを入れてくる。彼らは農業保護を主張し、大地主の利益を代表して、「強さ中貴族—シホントリ意識と傲慢さがある」一方で、大貴族社会の栄光を喜んで背負った生活様式を真似てくることを書いている (Hanák, *Vázlatok...*, 218.)⁹² すなわちこの時点でシホントリの内容と分類先の混乱が見られる⁹³。
- (94) Hanák, *A magyar "középosztály"...*, 23.
- (95) 次のことを参照。Pándi Ilona, *A magyar "középosztály" kérdéséhez, Századok*, 1965/1-2, 132-51, 147-8.; Vargyai Gyula, *Íjjas József, Az úri középrétegek szerepe a hatalom gyakorlásában, A Hortly-rendszer értékeléshez, Társadalmi Szemle*, 1985/11, 53-61.
- (96) Szász Zoltán, *A konzervatív liberális kora. A dualista rendszer konszolidált időszak, Magyarország története 1848-1890*, Bp., 1987, 1165-1332, 1271.
- (97) Kubinszky Judit, *Politikai antiszemizmus Magyarországon 1875-1890*, Bp., 1976, 229.
- (98) Z [oltán] Holvát, *The Rise of Nationalism and the Nationality Problem in Hungary in the Last Decades of Dualism, Acta Historica*, 1963/1-2, 1-38.; Iván T. Berend and György Ránki, *Economic Factors in Nationalism. The Example of Hungary at the Beginning of the Twentieth Century, Austrian History Yearbook*, 1967/3, 163-186.
- (99) Láng Lajos, *A társadalmi deficit, Függetlenül Nőrádi Sontaghi Pál nyílt levele a szerzőhöz s a szerző arra vonatkozó válasza*, Bp., 1881, rep.: 1986.
- (100) Censor [Bekics Gusztáv], *Társadalmunk és nemzeti hivatalunk*, Bp., 1884.
- (101) Revisor [Margitay Dező], *A gentry maradi*, Bp., 1885.
- (102) Concha Győző, *A gentry, Budapesti Szemle*, 1910, 1-34, 173-199.
- (103) Szücsi [Bajza] József, *A gentry, Turnul*, 1910, 181-3.
- (104) Berzeviczy Albert, *A gentryről, Nemzet*, 1884.

- szepit. 28., okt. 1. 2. *Beszédek és tanulmányok* II, Bp., 1905., 233-253.
- (32) Berzeviczy. 252.
- (33) ハナークによればはタクシチヤメルセイツイの「忠告」は「沈みゆく階級を没落と反動の典型的かつ必然のコース上で止めることはなかった」(Hanák, A magyar "közposztály"..., 30.)。
- (34) この著作は科学アカデミー歴史学研究所が編纂した通史のなかで「ジェントリの新保守主義」の例としてあげられ (Szász Zoltán, 1270-1.)。
- (35) この部分はジェントリの排他性を非難するセクファーに引用されている (Szekfi, rep. 318.)。
- (36) 註(7)にあげたメネテクの研究を参照。
- (37) 家系は十六世紀にまで遡ることができ、父が残した百ホルド程の土地があり、県の官僚から国の議員になっていく。クビンスキに言わせれば「上昇志向のジェントリ」がたどることなきた経歴を進んだ」(Kubinszky, 54-5.)。
- (38) 党綱領は Kubinszky, 156-7.
- (39) Simonyi Iván, *Nemzeti tragikomédia*, Bp., 1880., 17-8.
- (40) gróf Andrássy Géza, *Az otthon mentesítő törvények*, Bp., 1883.; Somogyvári [Séchényi] Imre, "Amerikai levelek" egy hosszabb zárszóval új. Széchenyi Imre *grófnól*, Bp., 1883.
- (41) Berzeviczy. 249.
- (42) 女性はすべて排除されていた。旧来の有権者として登録されていたのは七四年に有権者の五分の一ほどで、その後減少し続け、一九〇〇年には四パーセントほどになっている。
- (43) 正確には独立戦争末期の四九年七月にセグド議会で平等が宣言されているが、実行に移されることはなかった。
- (44) ハルモシヤも貴族化についての評価を再検討すべきであること、そしてこのためには、十九世紀ヨーロッパの一般的慣行と比べるための必要性を説くところ (Halmas Károly, Rangemelések a Habsburg monarchiában, *Vérs (nem csak) a városban*, Debrecen, 1995., 445-481.)。
- (45) 同様なことは、ジェントリやブルジョアと結び付けられて語られてきた「中間階級」「中間層」についても言えるだろう。しかもこの場合、現在におおつては(再び)理念やプログラムとしての意味を持って語られる場合もある。

(一橋大学助手)